

住宅論 「私たちがこれからを生きるために住む家」について論考する。

日大生産工(院) ○今井 優稀 日大生産工 篠崎 健一

1. はじめに

1.1. 研究の背景

住宅が、社会とかかわりを持つことの可能性について篠原一男¹⁾は『住宅論』で「私たちの仕事の住宅はいつもひとつの人間家族を通してしかこの社会と接触するみちはない。(中略)個を通して全体をとらえるという過程は、居直りどころか、もっとも正統的な人間の社会への接近法なのである¹⁾。」と述べている。私は住宅という小さな存在と向き合うことで、社会の一端が理解できるということに、深く感銘を受けた。また、私は住宅が、社会に何らかの影響を与える可能性があるのではないかと考え、住宅設計することを決意した。

1.2. 母の家を設計する理由

ル・コルビジェのレマン湖畔の『小さな家(ヴィラ・ル・ラク)』とロバート・ヴェンチューリ²⁾の『母の家(チエスナット・ヒルの住宅)』は、どちらの家も挑戦的な住宅である。小さな家では後の『サヴォア邸』で表現した5原則の一端が見える。ヴェンチューリの母の家の場合も、モダニズムに対して批判的であり、どちらの建築もその時代を代表するような建築である。

この2つの住宅には、住み手が母であるという共通点がある。2つの住宅が社会に影響を与える建築となった要因の1つには、施主が母であったことが挙げられると私は考える。少なくともヴェンチューリは「彼の母は、縫切りや、打合せや、要求項目の細かいリストなどはなしに、彼を言頼して設計をまかせきった。」³⁾と述べている。2人の巨匠とそれぞれ母との関係性、そして母の寛容さが、挑戦的な住宅の設計を可能にし、現在でも名作として評価されているのだと私は考える。そこで私にとって最も身近で親密な存在である母を「ひとつの人間家族」の対象とし、住宅設計をする。

2. 研究の方法

母の家を設計するためには、何度も母と打ち合わせする必要がある。一週間程度で設計案をまとめ、その案を母に見せながら対話を重ねる(Fig. 2)。母との会話から得られる気づきや、設計している際に考えることを、次の設計案に反映させる。そして9作品目を母の家の本作品とする。また母の家を設計するにあたり考えたことや設計の過程をまとめ、この後に私が執筆する『住宅論』を考えるまでの手がかりとする。

・・・外観がどうしてほしいとかはそんなではないんだけど、

母: 設計してくれるのであれば、他人が見て目を引くような家であつてほしいし、外から中が全く想像できないような家がいいなどは思う。今建ってる家ってさ、あそこがリビングだらうなとか、容易に想像できる家しか建ってないじゃない。

私: まあ要塞のような家ってのはそういうことだよね。あとは、あんまり人と関わりたくないことに矛盾してるかもしれないけど、どんな人が住んでるのかなみたいな。

母: あの引っ込み思案で人が嫌いな割には人と違うことが好きなんですよ。よくわかってると思うけど。だから家にもそういうものを求めたいなとは思う。

私: ずっとそういうのはどっかにある。その家の象徴性っていうか、機能とは別に。見たことあるような家が建つのは嫌だよね。

例えばその井上邸とか見たけどさ・・・

Fig. 1 母との対話 一部分

3. 模索する(設計過程)

3.1. 母のための空間の模索

母からの要望は「要塞のような家」である。母は繊細な人であり、閉じこもるための空間を母は家に求めている。しかし私は母を家に閉じ込めてしまうことが正しいとは思えない。その間を葛藤し「閉じているようで開いているような空間」を設計する。私はこの空間を単純なダイアグラムで表すことは不可能だと考える。理想とする空間を模索するために、何度も検討を

*1) 篠原一男 (1925-2006) は日本の住宅作家である。代表的著書に『住宅論』があり、代表作に「白の家」「未完の家」「上原通りの住宅」などがある。

*2) ロバート・ヴェンチューリ (1925-2018) は、建築家である。代表的著書に『建築の多様性と対立性』『ラスベガス』があり、代表作に「母の家」などがある。

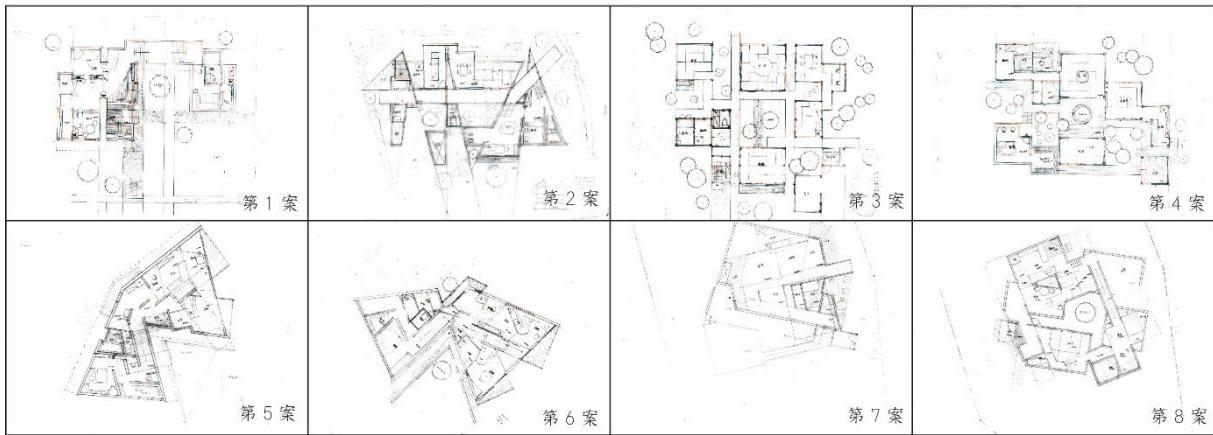


Fig.2 模索した母の家 計8案

重ね、計8回設計した (Fig. 2)。

3.2 母との対話

各案がまとまった段階で母と対話し、私と母の求める空間のすり合わせをする。母からの要望は機能面が多い。具体的には家事動線の要望や、部屋の使い方の要望、などがある。母からの要望と私が表現したい空間とで折り合いをつけながら設計する。

3.3 関係性を設計する

坂本一成³⁾は『建築家・坂本一成の世界』において「建築は絶対的な単一のものとして在るのではなく、複数の要素とそれらの関係から成り立っている。」⁴⁾と述べている。建築は複数の要素とそれらの関係によって成り立っているため、建築を設計することはその関係性を設計することであると私は理解している。私が母の家を設計する際、母と家、母と人、母と自然、母と社会などあらゆるものとの関係を設計する。

4. 母の家を設計した結果と考察

8案検討したその後、9案目に設計したものを作成する。母の家として、一応の設計を終了とする。断面図では半地下の閉じた空間と中二階ほどに位置する開いた空間の対比を示している (Fig. 3)。この2つの空間の対比は、この住宅を構成する1部であり、様々な関係によりこの家は設計されている。作品を見た母は「機能ばかり気にしていたけれど、伝えたい空間わかった気がする」と話している。私が母のために設計した「閉じているけど開いている空間」が母に伝わったと解釈している。

5. 展望

私の場合、母の家を設計することは、母という個人と向き合うことである。それは直接、社会を理解することではない。しかし、社会も母もどちらも、様々なものの関係によって成り立っていると捉えるならば、その構造は似ているのではないか。

社会が個人の集合であるとすると、母という個人を尊重することは重要なことである。私は住宅設計を通して個人を尊重することで、社会に対してもわずかでも良い影響を及ぼすのではないかと考えている。これらの母の家を設計したことで得られた視点や問題意識を手掛かりに私は住宅論を執筆する。

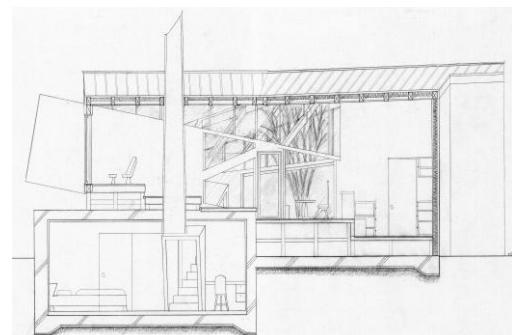


Fig. 3 母の家 断面図

参考文献

- 1) 篠原一男, 住宅論, 鹿島出版会, (1970), p206
- 2) ル・コルビュジエ, 小さな家:1923, 集文社, (1980)
- 3) フレデリック・シュワルツ, 母の家:ヴェンチューリのデザインの進化を追跡する, 鹿島出版会, (1994) p22
- 4) 坂本一成, 長島明夫, 建築家・坂本一成の世界, LIXIL 出版, (2016), p64

*3) 坂本一成(1943-)は日本の住宅作家である。代表的著書に『建築に内在する言葉』があり、代表作に「House F」「コモンシティ星田」などがある。

。